

陸前高田市婦人消防連絡協議会の活動内容

岩手県 陸前高田市婦人消防連絡協議会

岩手県最南端の市。太平洋に面した三陸海岸の南寄りに位置する。三陸海岸南部はリアス式海岸が続き、西の唐桑半島と東の広田半島に挟まれた広田湾の北奥に陸前高田の平野が広がる。広田湾奥には気仙川が流れ込み、土砂で形成された砂浜には高田松原と呼ばれる約7万本の松原が東西に続いていた。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災で、沿岸部の市街地はほぼ壊滅状態となる。市庁舎、消防署、JR陸前高田駅、国道45号線の気仙大橋崩落など、市の公共機関の多くが津波により全壊した。

矢作町元屋敷地区は、広田湾に注ぐ気仙川の支流・矢作川が流れる山間部であるが、津波は支流を遡上し津波浸水高は9.5mに達した。リアス式の三陸海岸は多数の川が湾に注いでいる。沿岸部の小友町新田では16.6m、米崎町館では17.5m、道の駅・高田松原では15.3mの津波浸水高を記録、市の全世帯中の7割以上が被害を受けた。

市の人口約2万4000人のうち、警察発表の死亡者数1,548人、行方不明者数340人（平成23年8月19日現在）。

地盤沈下も起こった。小友町西の坊で-84cm、米崎町高畑-58cm、気仙町双六は-53cmを記録。岩手県内で1,000人以上の被害者が出たのは陸前高田市。岩手県内で最も大きな被害を受けた地域である。

●金濱さんの場合（小友町）

買い物中に地震が来た

市内のスーパー「リプル」でいちごを購入。リプルの中にあるケーキ屋さんでお茶をしようと思っていたら、ずんずんという感じで地震が始まった。私が今まで経験したことのないひどい揺れだった。店内から這い出すように外に出て駐車場まで必死でたどり着き、街灯ポールにすがりつくように座り込んだ。そこに近所のお婆さんがいたので「車で一緒に帰ろう」と声を掛けたが「リプルマイヤのバスが出る。それで帰るからいいよ」と言われた。待ってられないと思い、自分1人で車に乗り走り出した。既にホームセンター「コメリ」の前の信号が稼動しなかった。車での移動中ずっと窓を開け放していたので「3m以上の津波が来た」との防災無線が聞こえた。追い掛けるように大津波警報発令との無線も聞いた。私の車を先頭として後続の車がつながっていたが、アップルロードを無事に抜けて我が家に到着した。

信じられない光景

我が家は、海拔20mの広田湾を見晴らす高台で庭からは海が見える。帰宅すると海に近所の大きな家がゆったりと浮かんでいるのが見えた。信じられない光景を自分1

人で見ているのが恐ろしくて足が震えた。家族に連絡しようとしたが携帯電話はつながらない。小友の防波堤を津波が越えてくる。広田湾と太平洋の両方から大きな波が立ちあがっている。津波はこちらにえぐって来るように見えた。これでは我が家の下の畑まで波が来る・・・と思ったので、直ぐに車とトラックを高台に移動した。

避難者が家に来た

隣に住んでいる消防団の人が「姉さん、公民館に避難してきた人たちが危ないから受け入れてくれ」というので、「上げてきて」と伝えた。足の悪い高齢者を運ぶために一輪車（ネコ）を貸し出した。公民館は集落の避難所だが被害にあったことは一度もない。そうこうしている間に集落の人がガヤガヤと私の家に集まって来た。公民館の前の駐車場に置いた車は全部流された。公民館よりも高い場所にある家も西からえぐって来た波に流され、3人が亡くなった。公民館に逃げていればみんなと一緒に助かったのにと残念だった。

私の子どもは久慈市と宮古市にいるが、4日間連絡が取れなかった。道が通行止めで動けない。息子が駆けつけてくれたのは3日目だった。集落の中の大きな家が流されたのは、今でも本当だったのかと信じられない思いだ。

お寺が避難所に、食材集めに奔走

菩提寺の正徳寺住職（市役所職員）が、着のみ着のままの人たちを受け入れるということで、120～130人が寺へ移動した。私は毛布や夏ふとんなど、客用も子どもたち用も含めて全部の寝具を引っ張り出した。そして米、餅、じゃがいもや白菜などの野菜類、何時お客が来ても困らないようにと思って作り置きしているひじきの煮物などの保存食やカレー、冷凍食材などを正徳寺に持ち込んだ。

我が家の供出だけでは大人数には足りない。地区の被災しなかった各戸をトラックでまわり、寝具や食材などを出してくれるように「とにかく私たちは家もある、命もあるんだから、もの惜しみしないでいろいろ出して頂戴ね！」と呼び掛けてまわった。たまにはもの惜しみする人もいるから。でもみんな快くいろいろ出してくれたのは幸いだった。

畳敷きの庫裏で休む

正徳寺には集落の人だけでなく、広田や大船渡などの他地域から来ていて帰れなくなった人など併せて140人くらいがいた。正徳寺は避難所としては居心地がよかったと思う。大きな畳敷きの庫裏の中で、寝具そして食べものも充実していた。その日から私は家に戻らず3日間ほど泊り込んだ。心が落ち着かない状態で寺に避難した人たちに気を遣わせないように出来る限りのことはしようと思ったから。落ち着いてくれば自分たちのことはできるようになるだろうと思った。「それまでは手伝ってね」と婦人防火クラブ（以下、婦防）のクラブ員と話し合い、了解を取り付けた。

リプルの前で別れたお婆さんは、状況から見て正徳寺に来るはずなのに来ない。私は胸がやめてならなかった。あの時一緒に連れてくればよかったと自分を責めた。「リ

プルマイヤのバスに乗っていた人は他の避難所にいるよ」と夜 12 時頃に連絡があり、ほっとしたが眠れぬ一夜だった。

3 日目以降は、家から毎日正徳寺に通った。自衛隊などの支援は最後までなかったので 7 月 28 日の仮設住宅に入る日までお世話した。たんぼや畑のある農家が多いので食材に不自由はなかった。正徳寺の住職は「1 人になっても此処にいていいですよ」とのありがたい言葉をかけていたので、避難した人は、みんな安心してた。

自宅を開放

4 日目から我が家には、友人夫婦と義理の妹、そして他 3 人が 7 月末まで避難していた。我が家は水が出るし電気は停電だが発電機がある。庭にかまどをつくり、お湯を沸かした。「金濱にいけば髪が洗える」と正徳寺に避難している人が訪ねてきたり、近くの人が水を汲みに来たり・・・家はみんなに開放して使ってもらった。

電気がこないのでもコタツに入っても寒い。沸かした熱湯を大きなゴミ袋に入れ、それを発砲スチロールの箱の中に入れる。蓋をしてその箱をコタツに入れると朝から晩までポカポカと温かい。私はみんなにその方法を教えた。温かいのでみんなが驚き喜んでた。

婦防の仲間や避難してきた人などとの人間関係は穏やかだった。私は言いたいことはズバツと言うし、何か言われても気にしない性格。いわば「裸の付き合い」が好きだ。

物資を配給する

物資がどんどん入ってきた。公民館を会場にして物資を広げ、自分たちが必要なものを引き取ってもらったが、まだ余るので他地区に回した。

阪神大震災が起こった時、私たちの地域の婦防でも寄付を出した。今回は自分たちが被災し、多くの物資を頂いた。こんなに多くの方々や団体にお世話になるなんて驚きだった。世界中から私たちが受けた恩は忘れない。婦防クラブ員同士「あの時（阪神大震災）、あれっぽっちしか寄付しなかったこと、災害に対しての心くばりが足りなかったことが今では恥ずかしい気持ちだね」と、多くの物資を前に語り合った。

持ち回りで自主的な活動

被災状況が酷いため行政は全然動いてくれず、私たちの言葉（要望）を聞き入れてくれる状態ではなかった。とにかく自分たちでやるしかなかった。婦防はいままで消防団の支援部隊として活動してきたが、何年も同じ人が役員（リーダー）をやらない。持ち回り、毎年交替でその任務につく。役員をみんなが経験している状態で役割分担も決めている。市や消防団からの連絡がなくても自主的に動ける。そのことが今回のどこからも指示がない状況になっても、自分たちが必要と思うことは円滑に活動を進められたことにつながったと思う。

以前火事が起きた時、炊き出しに地域の婦防全員が取り掛かるとどうしても余分に

作ってしまう。冷たくて硬くなったおにぎりの処理や廃棄するなどの無駄が出るようになっていた。もったいないので話し合いをした。私の地域は10区に分かれている。最初の炊き出しは当該区で対応する、足りなければ他の区の協力要請を行い、要請を受けた区はすぐに活動に取り掛かることを取り決め、同時に各区間の連絡網も作った。今回の震災ではその連絡網は機能しなかったが、それぞれに経験があるので混乱や問題は起きなかった。

もちろん避難所のまとめ役や区長などの臨機応変、その場その時の指示と判断が行動を支えた。困ったのは電話が通じないことと、道がガレキだらけで車で動きがとれないことだった。

婦防活動を再開

10月末に震災後初めて婦防の地区役員会を開いた。消火器や火災報知器の取り扱い説明を仮設住宅に暮らしている人たちにも行いたい。できることから活動を再開するつもりだ。

海は今穏やか

「高田市はゼロメートル地帯だから地震・津波が来たら大変だな」と、夫と話していた。宮城県沖地震のような地震が起こると聞いていたけれど、それが現実に起こり、今までにない災害となった。これまで津波警戒警報が出たこともあるが肩透かしだったので、逃げない人もいた。そしてみんなが「此处までは波は来ない」と思い込んでいた。婦防では防災訓練を怠りなくしているが、実際の震災は本当に恐ろしかった。

支援活動中に、神奈川県相模原市に住む姪からの電話で「被災地では物資配給に列を作って順番を待っている。パニックにならず強奪もない日本は素晴らしいと外国のメディアがほめているよ」と聞いたが、こちらはテレビなど見ることもできない。何がどうなっているのか分からない状況だった。

津波の前と同じように、庭からは穏やかな海が見える。震災は嘘だったのかと思えるほどだ。私は大船渡の出身なので海が身近だ。我が家は被害がなかったこともあると思うが、海は好き。憎めない。

婦防も高齢化

高齢化でお世話をする人が多くなってきた。なんだか寂しい。地域の民生委員が独居高齢者のマップを作っている。民生委員の方から何等かの要請があれば協力する。地域の敬老会には婦防も協力しているし、他の団体から要請があれば協力する体制作りを重ねている。

●小野寺さんの場合（矢作町）

夜中に息子の安否確認

山間部で津波は来なかった地域。我が家でわかめの芯を抜く作業を近所の人 13 人とやっていた時に立ってられない地震があり、すぐに庭に出た。瓦が落ちると危ないので高い場所にある畑に避難した。放送はなかったので津波が起きる・・・という意識がなかった。停電になった。婦防は消防団 OB の指示を受けて動くことになっている。OB から津波が起きたことと、避難の人が来るから炊き出しの準備をするようにとの連絡があった。午後 8 時頃に私は車でクラブ員の家をまわり、米などの食材の供出を頼み、公民館で待機すると伝えた。

当日、夫は北海道に住んでいる娘が帰宅するというので一ノ関まで迎えに出掛けていた。新幹線は午後 2 時 47 分(地震は午後 2 時 46 分発生)に到着の予定だった。駅には無事到着したが携帯はつながらない。でも当日中に夫と娘は帰宅できた。

高田市役所に勤務している息子が心配だった。橋が流されて道は不通になっていた。夜 11 時頃、道路は寒さで凍りついていて、大きく山道を迂回して高田まで出た。市役所に行こうと思ったが車は入らない。避難所になっている小学校へ行ったらガスの臭いが充満していたので、息子は死んだな・・・と思った。朝 6 時から炊き出しをすることになっていたので、探すことをあきらめ公民館に戻った。炊き出しは使命感というよりも、とにかくやらなければならないことと思った。私が指示しなければ、みんなが動けないから。

おにぎりは均一に

1 日目は消防団後援会 (OB) の指示で動き、翌日からは矢作コミュニティセンターからの指示で炊き出しを担当した。婦防役員と相談しながらおにぎりを作る。道路が寸断されていたので帰宅困難者も避難していた。他の地域の避難所にも 200 人分のおにぎりを届け、消防団員への炊き出しもした。

おにぎりは、のりを巻いてあるもの巻かないもの、中身に梅干などの具材があるか否かが、受け取る人たちにとって結構大きな問題になることが分かった。疲れてくるとカリカリするのが人間だ。多くの人数に提供する時には同じ形・同じ味を心掛け、塩にぎりに徹しようとした。市役所職員の息子は助かって 3 日後に戻ってきた。体験から「おにぎりの大小や種類で避難者同士の関係が気まづくなる。ずっーと続けるならシンプルな塩にぎりがいいよ」との助言もあった。

役割分担で効率的な活動

私の地区の婦防団員は 150 人。炊き出し作業は 2~3 人で間に合う。全員が炊き出しの手伝いのためにコミュニティセンターに集まって来たが、やることは限られるし、多人数はじゃまなだけなので、必要な人数で炊き出しはやると伝え「家に帰って畑の手入れをしてよ。野菜を作ってみんなに提供しろよ」と、そして「みんなが被災者になっちゃダメなんだから」と言った。みんながそれぞれに気持ちよく協力してくれた。

●菅野さんの場合（気仙町）

家が流された

福祉関係の相談員をしている。車で同僚と共に広田町での家庭訪問の帰路の途中で地震が起きた。車を一端止めて揺れが治まるまで待った。道にブロック塀が倒れた光景を見ながら役所に戻ってきた。体育館に消防団員が人々を誘導していた。庁舎前の公園では多くの人がざわざわしていた。駅前の道路は閉鎖していたが、気仙大橋を通らないと帰宅できない。婦防の総会を控えて地域の財産である書類を自宅に保管しているの、どうしても帰りたかった。

気仙大橋を無事に通過し自宅にたどり着いたら（窓を閉めていたので情報はなにも知らなかった）、消防団の人から「何しているの、波が来ているよ！」と言われ、書類を持ち出し避難した。自宅は目の前は海、青い群青色をした津波を初めて見た。後に他の地域の人に聞くと津波は黒い色とのことだが、海底の色の影響があつての青色だったのかとも思う。あの色を忘れることができない。まるでドラマを観ているように現実感がないのに、ああ、すべてが流れていく・・・という確認はあつた。高齢者は膝を崩しガタガタと震えていた。人は一瞬にして顔の表情と身体の様子が変わることを知った。地域指定の避難所の前に駐車した車が流されていく時に、なぜかクラクションが鳴り出した。まるで車が「サヨナラ」とお別れを告げているようで切なかった。

保育所に避難

すぐそばのコミュニティセンターは既に人が溢れていたの、40軒の集落の人たちは近くの公立保育所に避難することになった。雪が降ってきて寒かった。どてらを着込んだ人や高齢者をおぶった人などが続々とやってきた。被災していない家々からお米などの食材が提供され、炊き出しをした。コミュニティセンターにもおにぎりを運んだ。発電機を持ち込んでくれる人もいた。保育所にあつた可愛らしいロウソクを灯したら「この避難所は温かい雰囲気がいいね」と言ってくれる人もいた。保育所には幼児の昼寝用の小さなふとんがあり、眠れないけれど寒さをしのぐには助かった。

婦防の書類は、自分のものではない預かりものだから気になった。総会が目前だったので直近の書類はバックの中に入れていた。そのバックは流されたが、後で娘が拾ってきた。普段はおっとりのんびりしている娘なのに、隣のお婆さんの世話をしながら一緒に避難していた。夫は職場にいたが、すぐに家に帰ったので助かった。同僚には亡くなった方もいる。

分散避難でも地域力発揮

私の住む長部地区の約半数の242戸（半壊・全壊含む）が被災した。当夜は高台の長部保育所に避難したが、近隣の今泉地区がほぼ全壊・流出なので、長部保育所に避難したいとの申し入れがあり、話し合いの結果、集落の人々は保育所を出て88戸が4

つに分散、流されずに残っている家や公民館に避難することになった。そこで米や野菜などを持ち寄り避難生活に入った。

空き地で火を起こし、お湯を沸かして発砲スチロールの箱に満たし、幼児の風呂代わりとか高齢者の身体を拭いたりする容器代わりに使った。またゴミ袋にお湯を入れて発砲スチロールの箱に詰めコタツ代わりにするなどの工夫をした。

私と家族は4日目に国道の上にある被災を受けなかった実家に避難した。それからコミュニティセンターの会長の指示の下、当番制の役割分担を決め行動予定表を作り、地域の公民館で活動を開始した。人手があってもその場になると自分は何をしていいのか分からず、かえって足手まといになることもあるが、役割分担と当番制にしたことは良かった。「地域力」というか、お互いに助け合う活動をスムーズに行うことができた。

震災による心の傷

一緒に訪問活動をしていた同僚は、私より10歳も若いのに犠牲になってしまった。役所までは一緒に帰ってきたのに沿岸部在住の私が助かり、なぜ彼女が亡くなってしまったのかと自分を責めた。それで役所にはしばらく行けなかったけれど、上司が「仮庁舎ができたから出て来い」と声を掛けてくれたので勤務に戻った。障害のある子どもたちや相談に来ていた方々の安否確認から仕事に復帰した。

継続的な支援を望む

全国の障害者団体などからは続々と支援物資が届く。しかし物資の支援は単発だ。母親サークルの継続とか、安定した生活のための継続的な支援が欲しい。

住民は被災から生き延びたことの安堵感と同時に被災体験を思い出し、悲しみや不安感が深くなっている。今は生活や仕事のこと、家族の問題などの課題がだんだんと表面化してきた状態だ。

身内へのいとおしい気持ち

この地域に暮らす人間は、昔から地震が来たら津波が起きることを聞かされて育った。しかし「津波てんでんこ」という言葉はこの辺では聞いたことがない。警報で「6mの津波予報」といわれても3mくらいかな、「1m」と聞けば30cm程度だろうと、甘く受け止めていたことは事実だ。本当にまさか・・・の出来事だった。3日かけて甥が生きて実家に帰って来た時には、おもわず抱きついてしまった。身内や家族がとていとおしい。自宅があった元の場所に戻りたいと思うが、地盤沈下で住むことはできないだろう。海を見ると悲しい。何もかも津波で持ってもっていかれて何も無いのだけれど、ここは故郷だから。私たちだけの代で終わりではないから、娘の帰ってくる家をなんとか再建したいと準備中だ。

地域のコミュニティ力

普段の隣近所との付き合いは、こういうときこそ生きるのだと思った。地域では知らず知らずのうちに助けあう力が出来ていたんだなと思った。避難者同士と一緒に避難所で暮らしたことは、互いに学ぶことも多かったのではなかろうか。

●今上さんの場合（広田町）

仕事中に地震が来た

2011年の5月に地域の会長に就任したばかり。私は広田港の漁協職員なので地震の時は職場にいた。3階の鉄筋建てが倒れるかと思うほどに揺れ、廊下のロッカーが転倒しそうになったので、男性職員が押さえてしのいだ。若い男性職員は消防団員が多い。すぐに漁協を飛び出して行った。地震がやや落ち着いてから建物の中にいる来客や職員は一端外に出た。

来客がどこに避難したのか今もって知らない。漁協は金融機関でもあるので現金を金庫に入れるなど緊急の対処をした。帰宅するように指示が出た。残る職員は近くのお寺に避難することになった。3時過ぎに福島に住んでいる息子からの安否を気遣うメールが着信し、それに「たぶん大丈夫」と返信。

自宅は車で10分かからない距離だが、海の側を通らないと家には帰れない。母が1人で家にいるので早く戻りたかった。「波が来ないで欲しい・・・」と思い、車窓から外の様子を見ながら通過した。自宅は同じ広田町だが山間部なので海は見えない。家に到着した途端、海方面から「ウワーッ、ゴーッ」という凄惨な音が聞こえた。津波が来たと思ったので、家で待機した。夜8時頃に消防団の人が、隣家の中学生を高台にある中学から送り届けてくれた。その人から津波被害の状況を聞いた。

仙台と福島に暮らしている子どもは無事で1週間ほどして帰宅してきた。夫は配達の仕事をしている。矢作町で地震に遭遇して市内に戻ったが、市の体育館近くは人が溢れているので裏道を経由して帰宅した。夫は一ノ関の出身なので地震が起きたら「津波」という連想は全くなかったとのこと。

沿岸部の私たちは、地震が起きればすぐに「津波が来る」と教えられてきた。漁協では津波の緊急事態が起きることを想定して避難マニュアルがあるなど、地震イコール津波と考えるのは共通していること。だからすぐに高台に逃げる。この状況下で予想するよりも死者が少なかったのは、そんな意識が住民にあったからではないだろうか。せつかく逃げ出したのに第一波が引いたときに「おじいちゃんの薬を忘れた」などで、家に戻った人たちに亡くなった例が多いと聞いている。

炊き出しは自然に始まった

私は、震災当日は婦防の役員ではなかった。私の地区の保育園の子どもたちは、小学校に避難し体育館で一晩を過ごした。私は保育園での炊き出しに参加したが、誰が指示したからやるということではなく、米などをみんなが持ち寄って炊き出しが始ま

った。近隣の地域でも同様にごく自然に炊き出しが始まったと聞いている。

私たちの地区は自衛隊の支援が早かったので物資は潤沢であった。婦防は毎日分担して4～5名ほどが炊き出しに参加した。シフト制が自然に出来上がっていた。自衛隊が米を炊き、ボランティアの人たちと共におにぎりなどを作る作業は5月の連休近くまで行った。

地域の各家には大きな冷蔵庫を供えている。電気が不通になったので冷凍食材を供出したり、解けてしまうので「今日はあわびご飯よ」と、結構食材は豊かだった。フランス料理の提供とかバーベキューなども行った。そして物資配給のための仕分けなども担当した。役員は持ち回りで勤めることになっている。役員だから指示する、役員でない人は指示に従うということではない。その日からごく普通に炊き出しを始めたのはすごいことだと思う。役員を交代でみんなが経験してノウハウを伝承していくことが大切なのだと思った。

職場に復帰

私は1週間ほどで漁協の仕事に戻った。2階の金庫は残っていた。机の引き出しの中に入れておいた実印や私物も濡れていたが大丈夫だった。職員の自宅は高田市全域にわたる。同僚1人が亡くなり、職員の家族で幾人かが亡くなり、家を流された職員もいる。

漁業も大きな被害を受けた。ホタテや牡蠣の養殖施設も破壊された。船も流され作業場も失ったが、来春にワカメの水揚げができるように11月から12月の時期にワカメの種付け作業を進めているところだ。行政そして漁協などが協力してなんとか復興しようとしている。津波の被害はむごいことだか、海が悪い訳ではない。海のめぐみに生かされている。元に戻そうとみんなが頑張っている。今年をあわびの出荷は見合わせたが、それは広田の海の資源保護も考えてのことだ。海の底はきれいだとのこと。時間はかかるけれど頑張っていることを伝えたい。

家を流された人でも同じ場所に家を再建したい、住んでいたところが一番いいと言う人は多い。しかし、被災しなかった私たちが「被災者の気持ちや今の状況が分かる」などと言うことはできない。仮設住宅に入った人が「ここは寒い」と言うのも聞いた。また生きる気力を失くしている人がいるのも事実。独居の高齢者のことも心配だ。

●コメント

災害時の炊き出しは自然に始まる

出席者4人全員が地震発生当日、炊き出し支援活動に入った。越前高田の婦防各地区役員は定期的な交替制だ。団員の多くがリーダー役を経験する慣わしで、常時役割分担を定めている。円滑な支援活動が展開できた背景には、非常時に備えての自然な体制作りがあった。消防団や婦防OBによる経験豊かな指示も機能した。炊き出しはシフト制で臨機応変に対応したことも、効率的で無駄の少ない支援につながった。

食材や必要な物資の提供を積極的に呼び掛ける、また「炊き出し役は間に合うから、畑を作って野菜を供出しろ」と指示を出すなど、リーダーの統率力が功を奏した。

婦防団員また地域住民同士の信頼と連帯感が脈々と醸成されている地域だからこそ可能となった共助の支援活動だ。

思いやりの工夫

避難所に通いで支援活動をしながら、自宅では避難者を預かり、洗髪などの施設を提供するなど、困っている人を見過ごすことはできない、自分の出来るだけのことをするという「忘己利他」（もうこりた＝仏教で言うところのボランティア精神）の実践があった。

熱湯を入れたゴミ袋を発泡スチロールの箱に入れコタツの熱源とすることや、発砲スチロール箱を容器にして幼児の入浴などに用いるなど女性らしい利用術。また炊き出しは長期間に及ぶ可能性のある時には受け取る人の気分を考え、シンプルな塩にぎりにするなど、避難者の立場に立った配慮と工夫があった。

情報と交通路の確保

通信の不通やガレキによる道路の分断などが支援活動の障害となった。災害時ライフラインの一時も早い復旧が必要だ。

ふるさとを愛する気持ち

三陸地域で伝承している言葉「津波てんでんこ」は、陸前高田では使われていないようだ。一家全滅・集落消滅しないよう「自分の命は自分で守れ」ということで、家族や他者を助けられなかったとしても、それを非難しないのは不文律だが、被災者も被災しなかった人も地域の災害から無縁でいる人はいない。心の傷を誰もが抱えている。「海のめぐみ」で生きている人々の多い地域であり、自分たちが育った故郷を愛する気持ちはどなたも強い。

岩手県最大の被災地

陸前高田市の中心部はコンクリート製の建物の躯体が残りガレキ撤去途中だ。津波襲来時に消防本部に残っていた 12 人の職員は、無線塔の上に避難し自衛隊ヘリで救出された。無線塔から写した画像を見せていただいたが、庁舎屋上を波が襲う様子は、大海の嵐に翻弄される船の甲板にいるような凄まじさだ。

出席者は、沿岸部在住の 1 人が家を流され、避難所生活を経て実家に避難中。他 3 人は山間部あるいは高台の在住で家族・家屋に直接の被害はない。津波襲来を高台から見た人は 2 人、他の 2 人は山間部在住なので津波を見ていない。

岩手県の他地域（大槌町・釜石市・宮古市）調査で表出した、避難所に避難してきた人とのコミュニケーションの問題や避難所での困ったことなども伺ったが、円滑な交流があったとの由。婦防活動の課題（過疎化・高齢化・防災訓練等）の抽出もできなかった。（了）